

押絵と旅する男

江戸川乱歩

この話が私の夢か私の一時的狂気の幻でなかったならば、あの押絵と旅をしていた男こそ狂人であったに相違ない。だが、夢が時として、どこかこの世界と喰違った別の世界を、チラリと覗かせてくれる様に、又狂人が、我々の全く感じ得ぬ物事を見たり聞いたりすると同じに、これは私が、不可思議な大気のレンズ仕掛けを通して、一刹那、この世の視野の外にある、別の世界の一角を、ふと隙見したのであったかも知れない。

いつとも知れぬ、ある暖かい薄曇った日のことである。その時、私は態々魚津へ蜃気楼を見に出掛けた帰り途であった。私がこの話をする時、時々、お前は魚津なんかへ行ったことはないじゃないかと、親しい友達に突っ込まれることがある。そう云われて見ると、私は何時の何日に魚津へ行ったのだと、ハッキリ証拠を示すことが出来ぬ。それではやっぱり夢であったのか。だが私は嘗て、あのように濃厚な色彩を持った夢を見たことがない。夢の中の景色は、映画と同じに、全く色彩を伴わぬものであるのに、あの折の汽車の中の景色だけは、それもあの毒々しい押絵の画面が中心になって、紫と臙脂の勝たれ色彩で、まるで蛇の眼の瞳孔の様に、生々しく私の記憶に焼ついている。着色映画の夢というものがあるのだろうか。

私はその時、生れて初めて蜃気楼というものを見た。蛤の息の中に美しい龍宮城の浮んでいる、あの古風な絵を想像していた私は、本物の蜃気楼を見て、膏汗のにじむ様な、恐怖に近い驚きに撃たれた。

魚津の浜の松並木に豆粒の様な人間がウジャウジャと集まって、息を殺して、眼界一杯の大空と海面とを眺めていた。私はあんな静かな、哑の様にだまつている海を見たことがない。日本海は荒海と思い込んでいた私には、それもひどく意外であった。その海は、灰色で、全く小波一つなく、無限の彼方にまで打続く沼かと思われた。そして、太平洋の海のように、水平線はなくて、海と空とは、同じ灰色に溶け合い、厚さの知れぬ靄に覆いつくされた感じであった。空だとばかり思っていた、上部の靄の中を、案外にもそこが海面であって、フワフワと幽霊の様な、大きな白帆が滑って行ったりした。

蜃気楼とは、乳色のフィルムの表面に墨汁をたらして、それが自然にジワジワとにじんで行くのを、途方もなく巨大な映画にして、大空に映し出した様なものであった。

遙かな能登半島の森林が、喰違った大気の変形レンズを通して、すぐ目の前の大空に、焦点のよく合わぬ顕微鏡の下の黒い虫みたいに、曖昧に、しかも馬鹿馬鹿しく拡大されて、見る者の頭上におしかぶさって来るのであった。それは、妙な形の黒雲と似ていたけれど、黒雲なればその所在がハッキリ分っているに反し、蜃気楼は、不思議にも、それと見る者との距離が非常に曖昧なのだ。遠くの海上に漂う大入道の様でもあり、ともすれば、眼前一尺に迫る異形の靄かと見え、はては、見る者の角膜の表面に、ポツツリと浮んだ、一点の曇りの様にさえ感じられた。この距離の曖昧さが、蜃気楼に、想像以上の不気味な気違いめいた感じを与えるのだ。曖昧な形の、真黒な巨大な三角形が、塔の様に積重なって行ったり、またたく間にくずれたり、横に延びて長い汽車の様に走ったり、それが幾つかにくずれ、立並ぶ檜の梢と見えたり、じつと動かぬ様でいながら、いとはなく、全く違った形に化けて行った。

蜃気楼の魔力が、人間を気違いにするものであったなら、恐らく私は、少くとも帰り途の汽車の中までは、その魔力を逃れることが出来なかったであろう。二時間の余も立ち尽して、大空の妖異を眺めていた私は、**その夕方魚津を立つて、汽車の中に一夜を過ごすまで、全く日常と異った気持でいたことは確である。**若しかしたら、それは通り魔の様に、人間の心をかすめ冒す所の、一時的狂気の類でもあったであろうか。

魚津の駅から上野への汽車に乗ったのは、夕方の六時頃であった。不思議な偶然であろうか、あの辺の汽車はいつでもそうなのか、私の乗った二等車は、教会堂の様にガランとしていて、私の外にたった一人の先客が、向うの隅のクッションに蹲っているばかりであった。



汽車は淋しい海岸の、けわしい岬や砂浜の上を、単調な機械の音を響かせて、際しもなく走っている。沼の様な海上の、靄の奥深く、黒血の色の夕焼が、ボンヤリと感じられた。異様に大きく見える白帆が、その中を、夢の様に滑っていた。少しも風のない、むしむしする日であったから、所々開かれた汽車の窓から、進行につれて忍び込むそよ風も、幽霊の様に尻切れとんぼであった。沢山の短いトンネルと雪除けの柱の列が、広漠たる灰色の空と海とを、縞目に区切つて通り過ぎた。

親不知の断崖を通過する頃、車内の電燈と空の明るさが同じに感じられた程、夕闇が迫つて来た。丁度その時分向うの隅のたった一人の同乗者が、突然立上つて、クッションの上に大きな黒繻子の風呂敷を広げ、窓に立てかけてあつた、二尺に三尺程の、扁平な荷物を、その中へ包み始めた。それが私に何とやら奇妙な感じを与えたのである。

その扁平なものは、多分額に相違ないのだが、その表側の方を、何か特別の意味でもあるらしく、窓ガラスに向けて立てかけてあつた。一度風呂敷に包んであつたものを、態々取出して、そんな風に外に向けて立てかけたものとしか考えられなかった。それに、彼が再び包む時にチラと見た所によると、額の表面に描かれた極彩色の絵が、妙に生々しく、何となく世の常ならず見えたことであつた。

私は更めて、この変てこな荷物持主を観察した。そして、持主その人が、荷物の異様さにもまして、一段と異様であつたことに驚かされた。

彼は非常に古風な、我々の父親の若い時分の色あせた写真でしか見ることの出来ない様な、襟の狭い、肩のすぼけた、黒の背広服を着ていたが、併しそれが、背が高く、足の長い彼に、妙にシツクリと合つて、甚だ意気にさえ見えたのである。顔は細面で、両眼が少しギラギラし過ぎていた外は、一体によく整つていて、スマートな感じであつた。そして、綺麗に分けた頭髮が、豊に黒々と光っているので、一見四十前後であつたが、よく注意して見ると、顔中に夥しい皺があつて、一飛びに六十位にも見えぬことはなかった。この黒々とした頭髮と、色白の顔面を縦横にきざんだ皺との対照が、初めてそれに氣附いた時、私をハッとさせた程も、非常に不気味な感じを与えた。

彼は叮嚀に荷物を包み終ると、ひょいと私の方に顔を向けたが、丁度私の方でも熱心に相手の動作を眺めていた時であつたから、二人の視線がガツチリとぶつつかつてしまった。すると、彼は何か恥かし相に唇の隅を曲げて、幽かに笑つて見せるのであつた。私も思わず首を動かして挨拶を返した。

それから、小駅を二三通過する間、私達はお互の隅に坐つたまま、遠くから、時々視線をまじえては、氣まずく外方看向くことを、繰返していた。外は全く暗闇になつていた。窓ガラスに顔を押しつけて覗いて見ても、時たま沖の漁船の舷燈が遠く遠くポツツリと浮んでゐる外には、全く何の光りもなかった。際涯のない暗闇の中に、私達の細長い車室だけが、たった一つの世界の様に、いつまでもいつまでも、ガタンガタンと動いて行つた。そのほの暗い車室の中に、私達二人だけを取り残して、全世界が、あらゆる生き物が、跡方もなく消え失せてしまつた感じであつた。

私達の二等車には、どの駅からも一人の乗客もなかったし、列車ボーイや車掌も一度も姿を見せなかった。そういう事も今になって考えて見ると、甚だ奇怪に感じられるのである。

私は、四十歳にも六十歳にも見える、西洋の魔術師の様な風采のその男が、段々怖くなつて来た。怖さというもの、外にまぎれる事柄のない場合には、無限に大きく、身体中一杯に拡がって行くものである。私は遂には、産毛の先までも怖さが満ちて、たまらなくなつて、突然立上ると、向うの隅のその男の方へツカツカと歩いて行つた。その男がいとわしく、恐ろしければこそ、私はその男に近づいて行つたのであつた。

私は彼と向き合つたクッションへ、そつと腰をおろし、近寄れば一層異様に見える彼の皺だらけの白い顔を、私自身が妖怪でもある様な、一種不可思議な、顛倒した氣持で、目を細く息を殺してじつと覗き込んだものである。

男は、私が自分の席を立つた時から、ずっと目で私を迎える様にしていたが、そうして私が彼の顔を覗き込むと、



待ち受けていた様に、顎で傍らの例の扁平な荷物を指し示し、何の前置きもなく、さもそれが当然の挨拶でもある様に、「これでございますか」

と云った。その口調が、余り当り前であつたので、私は却て、ギョツとした程であつた。

「これが御覧になりたいのでございましょう」

私が黙っているの、彼はもう一度同じことを繰返した。

「見せて下さいますか」

私は相手の調子に引込まれて、つい変なことを云つてしまった。私は決してその荷物を見たい為に席を立つた訳ではなかったのだけれど。

「喜んで御見せ致しますよ。わたくしは、さつきから考えていたのでございますよ。あなたはきつとこれを見にお出でなさるだろうとね」

男は——寧ろ老人と云つた方がふさわしいのだが——そう云いながら、長い指で、器用に大風呂敷をほどいて、その額みたいなのを、今度は表を向けて、窓の所へ立てかけたのである。私は一目チラツと、その表面を見ると、思わず目をとじた。何故であつたか、その理由は今でも分らないのだが、何となくそうしなければならぬ感じがして、数秒の間目をふさいでいた。再び目を開いた時、私の前に、嘗て見たことのない様な、奇妙なものがあつた。と云つて、私はその「奇妙」な点をハッキリと説明する言葉を持たぬのだが。

額には歌舞伎芝居の御殿の背景みたいに、幾つもの部屋を打抜いて、極度の遠近法で、青畳と格子天井が遙か向うの方まで続いている様な光景が、藍を主とした泥絵具で毒々しく塗りつけてあつた。左手の前方には、墨黒々と不細工な書院風の窓が描かれ、同じ色の文机が、その傍に角度を無視した描き方で、据えてあつた。それらの背景は、あの絵馬札の絵の独特な画風に似ていたと云えば、一番よく分るであらうか。

その背景の中に、一尺位の丈の二人の人物が浮き出していた。浮き出していたと云うのは、その人物丈けが、押絵細工で出来ていたからである。黒天鷲絨の古風な洋服を着た白髪の老人が、窮屈そうに坐っていると、(不思議なことには、その容貌が、髪の色を除くと、額の持主の老人にそのままばかりか、着ている洋服の仕立方までそっくりであつた) 緋鹿の子の振袖に、黒縹子の帯の映りのよい十七八の、水のたれる様な結綿の美少女が、何とも云えぬ嬌羞を含んで、その老人の洋服の膝にしなだれかかっている、謂わば芝居の濡れ場に類する画面であつた。洋服の老人と色娘の対照と、甚だ異様であつたことは云うまでもないが、だが私が「奇妙」に感じたというのはそのことではない。

背景の粗雑に引かえて、押絵の細工の精巧なことは驚くばかりであつた。顔の部分は、白絹は凹凸を作つて、細い皺まで一つ一つ現わしてあつたし、娘の髪は、本当の毛髪を一本一本植えつけて、人間の髪を結う様に結つてあり、老人の頭は、これも多分本物の白髪を、丹念に植えたものに相違なかつた。洋服には正しい縫い目があり、適当な場所に粟粒程の釦までつけてあるし、娘の乳のふくらみと云い、腿のあたりの艶めいた曲線と云い、こぼれた緋縮緬、チラと見える肌の色、指には貝殻の様な爪が生えていた。虫眼鏡で覗いて見たら、毛穴や産毛まで、ちゃんと拵えてあるのではないかと思われた程である。

私は押絵と云えば、羽子板の役者の似顔の細工しか見たことがなかったが、そして、羽子板の細工にも、随分精巧なものもあるのだけれど、この押絵は、そんなものとは、まるで比較にもならぬ程、巧緻を極めていたのである。恐らくその道の名人の手になつたものであらうか。だが、それが私の所謂「奇妙」な点ではなかつた。

額全体が余程古いものらしく、背景の泥絵具は所々は落っていたし、娘の緋鹿の子も、老人の天鷲絨も、見る影もなく色あせていたけれど、はげ落ち色あせたなりに、名状し難き毒々しさを保ち、ギラギラと、見る者の眼底に焼つく様な生氣を持っていたことも、不思議と云えば不思議であつた。だが、私の「奇妙」という意味はそれでもない。

それは、若し強て云うならば、押絵の人物が二つとも、生きていたことである。

文楽の人形芝居で、一日の演技の内に、たった一度か二度、それもほんの一瞬間、名人の使っている人形が、ふと神の息吹を



かけられでもした様に、本当に生きていることがあるものだが、この押絵の人物は、その生きた瞬間の人形を、命の逃げ出す隙を与えず、咄嗟の間に、そのまま板にはりつけたという感じで、永遠に生きながらえているかと思えたのである。

私の表情に驚きの色を見て取ったからか、老人は、いとたのもしげな口調で、殆ど叫ぶ様に、

「アア、あなたは分つて下さるかも知れません」

と云いながら、肩から下げていた、黒革のケースを、叮嚀に鍵で開いて、その中から、いとも古風な双眼鏡を取り出してそれを私の方へ差出すのであった。

「コレ、この遠眼鏡で一度御覧下さいませ。イエ、そこからは近すぎます。失礼ですが、もう少しあちらの方から。左様丁度その辺がよろこばいましょう」

誠に異様な頼みではあったけれど、私は限りなき好奇心のとりことなつて、老人の云うがままに、席を立てて額から五六歩遠ざかった。老人は私の見易い様に、両手で額を持って、電燈にかざしてくれた。今から思うと、実に変てこな、氣違ひめいた光景であつたに相違ないのである。

遠眼鏡と云うのは、恐らく二三十年も以前の舶来品であろうか、私達が子供の時分、よく眼鏡屋の看板で見かけた様な、異様な形のプリズム双眼鏡であつたが、それが手摺れの為に、黒い覆皮がはげて、所々真鍮の生地が現われているという、持主の洋服と同様に、如何にも古風な、物懐かしい品物であつた。

私は珍らしさに、暫くその双眼鏡をひねくり廻していたが、やがて、それを覗く為に、両手で眼の前に持つて行つた時である。突然、実に突然、老人が悲鳴に近い叫声を立てたので、私は、危く眼鏡を取落す所であつた。

「いけません。いけません。それはさかさですよ。さかさに覗いてはいけません。いけません」

老人は、真青になつて、目をまんまるに見開いて、しきりと手を振つていた。双眼鏡を逆に覗くことが、何ぞそれ程大変なのか、私は老人の異様な挙動を理解することが出来なかつた。「成程、成程、さかさでしたっけ」

私は双眼鏡を覗くことに氣を取られていたので、この老人の不審な表情を、さして氣にもとめず、眼鏡を正しい方向に持ち直すと、急いでそれを目に当てて押絵の人物を覗いたのである。焦点が合つて行くに従つて、二つの円形の視野が、徐々に一つに重なり、ボンヤリとした虹の様なものが、段々ハッキリして来ると、びっくりする程大きな娘の胸から上が、それが全世界でもある様に、私の眼界一杯に拡がった。

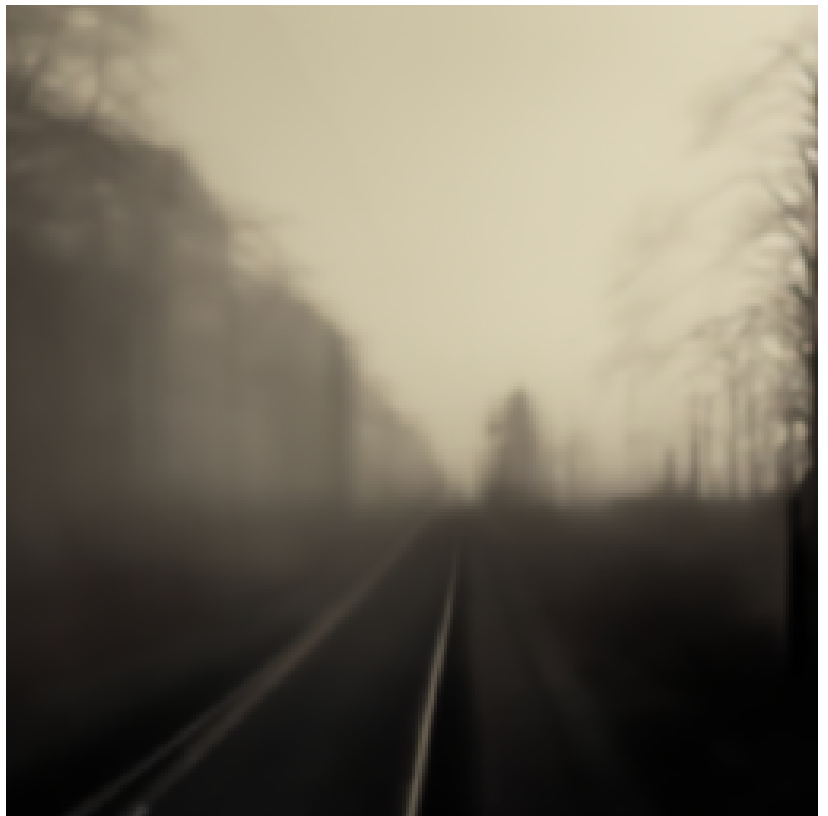
あんな風な物の現われ方を、私はあとにも先にも見たことがないので、読む人に分らせるのが難儀なのだが、それに近い感じを思い出して見ると、例えば、舟の上から、海にもぐつた蟹の、ある瞬間の姿に似ていたとでも形容すべきであろうか。蟹の裸身が、底の方にある時は、青い水の層の複雑な動揺の為に、その身体が、まるで海草の様に、不自然にクネクネと曲り、輪廓もぼやけて、白っぽいお化みたいに見えるが、それが、つうつと浮上つて来るに従つて、水の層の青さが段々薄くなり、形がハッキリして来て、ポツカリと水上に首を出すと、その瞬間、ハツと目が覚めた様に、水中の白いお化が、忽ち人間の正体を現わすのである。丁度それと同じ感じで、押絵の娘は、双眼鏡の中で、私の前に姿を現わし、実物大の、一人の生きた娘として、蠢き始めたのである。

十九世紀の古風なプリズム双眼鏡の玉の向う側には、全く私達の思いも及ばぬ別世界があつて、そこに結綿の色娘と、古風な洋服の白髪男とが、奇怪な生活を営んでいる。覗いては悪いものを、私は今魔法使に覗かされているのだ。といった様な形容の出来ない変てこな氣持で、併し私は憑かれた様にその不可思議な世界に見入つてしまつた。

娘は動いていた訳ではないが、その全身の感じが、肉眼で見た時とは、ガラリと變つて、生氣に満ち、青白い顔がやや桃色に上氣し、胸は脈打ち（實際私は心臓の鼓動をさえ聞いた）肉体からは縮緬の衣裳を通して、むしむしと、若い女の生氣が蒸発して居る様に思われた。

私は一渡り、女の全身を、双眼鏡の先で、嘗め廻してから、その娘がしなだれ掛つている、仕合せな白髪男の方へ眼鏡を転じた。





老人も、双眼鏡の世界で、生きていたことは同じであったが、見た所四十程も年の違う、若い女の肩に手を廻して、さも幸福そうな形でありながら、妙なことには、レンズ一杯の大きさに写った、彼の皺の多い顔が、その何百本の皺の底で、いぶかしく苦悶の相を現わしているのである。それは、老人の顔がレンズの為に眼前一尺の近さに、異様に大きく迫っていたからでもあったであろうが、見つめていればいる程、ゾッと怖くなる様な、悲痛と恐怖との混り合った一種異様の表情であった。

それを見ると、私はうなされた様な気分になって、双眼鏡を覗いていることが、耐え難く感じられたので、思わず、目を離して、キョロキョロとあたりを見廻した。すると、それはやっぱり淋しい夜の汽車の中であって、押絵の額も、それをささげた老人の姿も、元のままで、窓の外は真暗だし、単調な車輪の響も、変りなく聞えていた。悪夢から醒めた気持であった。

「あなた様は、不思議相な顔をしておいでなさいますね」

老人は額を、元の窓の所へ立てかけて、席につくと、私にもその向う側へ坐る様に、手真似をしながら、私の顔を見つめて、こんなことを云った。

「私の頭が、どうかしている様です。いやに蒸しますね」

私はてれ隠しみたいな挨拶をした。すると老人は、猫背になって、顔をぐっと私の方へ近寄せ、膝の上で細長い指を合図でもする様に、ヘラヘラと動かしながら、低い低い囁き声になって、

「あれらは、生きて居りましたろう」

と云った。そして、さも一大事を打開けるといった調子で、一層猫背になって、ガラガラした目をまん丸に見開いて、私の顔を穴のあく程見つめながら、こんなことを囁くのであった。

「あなたは、あれらの、本当の身の上話を聞き度いとはおぼしめしませんかね」

私は汽車の動揺と、車輪の響の為に、老人の低い、呟く様な声を、聞き間違えたのではないかと思った。

「身の上話とおっしゃいましたか」

「身の上話でございますよ」老人はやっぱり低い声で答えた。「殊に、一方の、白髪の老人の身の上話をでございますよ」

「若い時分からのですか」

私も、その晩は、何故か妙に調子はずれな物の云い方をした。

「ハイ、あれが二十五歳の時のお話でございますよ」

「是非うかがいたいものですね」

私は、普通の生きた人間の身の上話をでも催促する様に、ごく何でもないことの様に、老人をうながしたのである。すると、老人は顔の皺を、さも嬉しそうにゆがめて、「アア、あなたは、やっぱり聞いて下さいますね」と云いながら、さて、次の様な世にも不思議な物語を始めたのであった。

「それはもう、一生涯の大事件ですから、よく記憶して居りますが、明治二十八年の四月の、兄があんなに（と云って彼は押絵の老人を指さした）なりましたのが、二十七日の夕方のごとでござりました。当時、私も兄も、まだ部屋住みで、住居は日本橋通三丁目でした、親爺が呉服商を営んで居りましたがね。何でも浅草の十二階が出来て、間もなくのごとでござりましたよ。だもんですから、兄なんぞは、毎日の様にあの凌雲閣へ昇って喜んでいたものです。と申しますのが、兄は妙に異国物が好きで、新しがり屋でござんしたからね。この遠眼鏡にしろ、やっぱりそれで、兄が外国船の船長の持物だったという奴を、横浜の支那人町の、変てこな道具屋の店先で、めつけて来ましてね。当時にしちゃあ、随分高いお金を払ったと申し

て居りましたっけ」

老人は「兄が」と云うたびに、まるでそこにその人が坐つてでもいる様に、押絵の老人の方に目をやったり、指さしたりした。老人は彼の記憶にある本当の兄と、その押絵の白髪の老人とを、混同して、押絵が生きて彼の話を聞いてでもいる様な、すぐ側に第三者を意識した様な話し方をした。だが、不思議なことに、私はそれを少しもおかしいとは思感じなかった。私達はその瞬間、自然の法則を超越した、我々の世界とどこかで喰違っている処の、別の世界に住んでいたらいいのである。

「あなたは、十二階へ御昇りなすつたことがおありですか。アア、おありなさらない。それは残念ですね。あれは一体この魔法使が建てましたものか、実に途方もない、変てこんな代物でございましたよ。表面は伊太利の技師のバルトンと申すものが設計したことになっていましたからね。まあ考えて御覧なさい。その頃の浅草公園と云えば、名物が先ず蜘蛛男の見世物、娘剣舞に、玉乗り、源水の独楽廻しに、覗きからくりなどで、せいぜい変つた所が、お富士さまの作り物に、メーズと云つて、八陣隠れ杉の見世物位でございましたからね。そこへあなた、ニヨキニヨキと、まあ飛んでもない高い煉瓦造りの塔が出来ちまつたんですから、驚くじゃござんせんか。高さが四十六間と申しますから、半丁の余で、八角型の頂上が、唐人の帽子みたいに、とんがっていて、ちよつと高台へ昇りさえすれば、東京中どこからでも、その赤いお化が見られたものです。

今も申す通り、明治二十八年の春、兄がこの遠眼鏡を手に入れて間もない頃でした。兄の身に妙なことが起つて参りました。親爺なんぞ、兄め気でも違うのじゃないかつて、ひどく心配して居りましたが、私もね、お察しでしょうが、馬鹿に兄思いでしてね、兄の変てこんなそぶりが、心配で心配でたまらなかつたものです。どんな風かと申しますと、兄はご飯もろくろくたべないで、家内の者とも口を利かず、家にいる時は一間にとじ籠つて考え事ばかりしている。身体は痩せてしまい、顔は肺病やみの様に土気色で、目ばかりギョロギョロさせている。尤も平常から顔色のいい方じゃあござんせんでしたがね。それが一倍青ざめて、沈んでいるのですから、本当に気の毒な様でした。その癖ね、そんなでいて、毎日欠かさず、まるで勤めにでも出る様に、おひるツから、日暮れ時分まで、フラフラとどつかへ出掛けるんです。どこへ行くのかつて、聞いて見ても、ちつとも云いません。母親が心配して、兄のふさいでいる訳を、手を変え品を変え尋ねても、少しも打開けません。そんなことが一月程も続いたのですよ。

あんまり心配だものだから、私はある日、兄が一体どこへ出掛るのかと、ソツとあとをつけました。そうする様に、母親が私に頼むもんですからね。兄はその日も、丁度今日の様などんよりとした、いやな日でござんしたが、おひる過から、その頃兄の工場で仕立てさせた、当時としては飛び切りハイカラな、黒天鵲絨の洋服を着ましてね、この遠眼鏡を肩から下げ、ヒョロヒョロと、日本橋通りの、馬車鉄道の方へ歩いて行くのです。私は兄に気ぢられぬ様に、ついて行つた訳ですよ。よござんすか。しますとね、兄は上野行きの馬車鉄道を待ち合わせて、ひょいとそれに乗り込んでしまつたのです。当今の電車と違つて、次の車に乗つてあとをつけるという訳には行きません。何しろ車台が少のござんすからね。私は仕方がないので母親に貰つたお小遣いをふんばつして、人力車に乗りました。人力車だつて、少し威勢のいい挽子なれば馬車鉄道を見失わない様に、あとをつけるなんぞ、訳なかつたものでございますよ。

兄が馬車鉄道を降りると、私も人力車を降りて、又テクテクと跡をつける。そうして、行きついた所が、なんと浅草の観音様じゃございませんか。兄は仲店から、お堂の前を素通りして、お堂裏の見世物小屋の間を、人波をかき分ける様にしてさつき申上げた十二階の前まで来ますと、石の門を這入つて、お金を払つて「凌雲閣」という額の上つた入口から、塔の中へ姿を消したじゃあございせんか。まさか兄がこんな所へ、毎日毎日通つていようとは、夢にも存じませんでした。私はあきれてしまいましたよ。子供心にね、私はその時まだ二十にもなつてませんでしたので、兄はこの十二階の化物に魅入られたんじゃないかなんて、変なことを考えたものですよ。

私は十二階へは、父親につれられて、一度昇つた切りで、その後行つたことがありませんので、何だか気味が悪い様に思いましたが、兄が昇つて行くものですから、仕方がないので、私も一階位おくれで、あの薄暗い石の段々を昇つて行きました。窓も大きくございせんし、煉瓦の壁が厚うござんすので、穴蔵の様に冷々と致しましてね。それに日清戦争の当時ですから、その頃は珍らしかつた、戦争の油絵が、一方の壁にずっと懸け並べてあります。まるで狼みたいな、おつそろしい顔をして、吠えながら、突貫している日本兵や、剣つき鉄砲に脇腹をえぐられ、ふき出す血のりを両手で押さえて、顔や唇を紫色にしてもがいている支那兵や、ちょんぎられた辨髪の頭が、風船玉の様に空高く飛上っている所や、何とも云えない毒々しい、血みどろの油絵が、窓からの薄暗い光線で、テラテラと光っているのでございますよ。その間を、陰気な石の段々が、蝸牛の殻みたいに、上へ上へと際限もなく続いて居ります。本当に変てこんな気持ちでしたよ。

頂上は八角形の欄干丈で、壁のない、見晴らしの廊下になっていましたね、そこへたどりつくと、俄にパツと明るくなって、今までの薄暗い道中が長うござんただけに、びっくりしてしまいます。雲が手の届きそうな低い所にあつて、見渡すと、東京中の屋根がごみみたいに、ゴチャゴチャしていて、品川の御台場が、盆石の様に見えて居ります。目まいがしそ

なのを我慢して、下を覗きますと、観音様の御堂だつてずっと低い所にありますし、小屋掛けの見世物が、おもちゃのようで、歩いている人間が、頭と足ばかりに見えるのです。

頂上には、十人余りの見物が一かたまりになつておつかな相な顔をして、ボソボソ小声で囁きながら、品川の海の方を眺めて居りましたが、兄はと見ると、それとは離れた場所に、一人ぼっちで、遠眼鏡を目に当てて、しきりと浅草の境内を眺め廻して居りました。それをうしろから見ますと、白つぽくどんよりどんよりとした雲ばかりの中に、兄の天鵝絨の洋服姿が、クッキリと浮上つて、下の方のゴチャゴチャしたものが何も見えぬものですから、兄だということは分つていまして、何だか西洋の油絵の中の人物みたいな氣持がして、神々しい様で、言葉かけられるのも憚られた程でございました。

でも、母の云いつけを思い出しますと、そうもしてはいられませんので、私は兄のうしろに近づいて『兄さん何を見ていらつしやいます』と声をかけたのでございます。兄はビクツとして、振向きましたが、氣拙い顔をして何も云いません。私は『兄さんの此頃の御様子には、御父さんもお母さんもお大変心配していらつしやいます。毎日毎日どこへ御出掛なさるのかと思ひに思つて居りましたら、兄さんはこんな所へ来ていらしたのでございますね。どうかその訳を云つて下さいまし。日頃仲よしの私に丈けでも打開けて下さいまし』と、近くに人はいないのを幸いに、その塔の上で、兄をかき口説いたのですよ。

仲々打開けませんでした、私が繰返し繰返し頼むものですから、兄も根負けをしたと見えまして、とうとう一ヶ月來の胸の秘密を私に話してくれました。ところが、その兄の煩悶の原因と申すものが、これが又誠に変てこれんな事柄だったのでございますよ。兄が申しますには、一月ばかり前に、十二階へ昇りまして、この遠眼鏡で観音様の境内を眺めて居りました時、人込みの間に、チラッと、一人の娘の顔を見たのだ相でございます。その娘が、それはもう何とも云えない、この世のものとも思えない、美しい人で、日頃女には一向冷淡であつた兄も、その遠眼鏡の中の娘丈けには、ゾッと寒氣がした程も、すっかり心を乱されてしまつたと申しますよ。

その時兄は、一目見た丈けで、びっくりして、遠眼鏡をはずしてしまつたのですから、もう一度見ようと思つて、同じ見当を夢中になつて探した相ですが、眼鏡の先が、どうしてもその娘の顔にぶつかりません。遠眼鏡では近くに見えても實際は遠方のことだし、沢山の人混みの中ですから、一度見えたからと云つて、二度目に探し出せると極まつたものではございませんからね。

それからと申すもの、兄はこの眼鏡の中の美しい娘が忘れられず、極々内気なひとでしたから、古風な恋わずらいをわずらい始めたのでございます。今のお人はお笑いなさるかも知れませんが、その頃の人間は、誠におっとりとしたものでして、行きずりに一目見た女を恋して、わずらいついた男なども多かつた時代でございますからね。云うまでもなく、兄はそんなご飯もろくろくたべられない様な、衰えた身体を引きずつて、又その娘が観音様の境内を通りかかることもあろうかと悲しい空頼みから、毎日毎日、勤めの様に、十二階に昇つては、眼鏡を覗いていた訳でございます。恋というものは、不思議なものでございますね。

兄は私に打開けてしまうと、又熱病やみの様に眼鏡を覗き始めましたつが、私は兄の氣持にすっかり同情致しましてね、千に一つも望みのない、無駄な探し物ですけれど、お止なさいと止めだてする氣も起らず、余りのことに涙ぐんで、兄のうしろ姿をじつと眺めていたのですよ。するとその時……ア、私はあの怪しくも美しかった光景を、忘れることが出来ません。三十年以上も昔のことですけれど、こうして眼をふさぎますと、その夢の様な色どりが、まざまざと浮んで来る程でございます。

さつきも申しました通り、兄のうしろに立つていますと、見えるものは、空ばかりで、モヤモヤとした、むら雲の中に、兄のほつそりとした洋服姿が、絵の様に浮上つて、むら雲の方で動いているのを、兄の身体が宙に漂うかと見誤るばかりでございます。がそこへ、突然、花火でも打上げた様に、白つぽい大空の中を、赤や青や紫の無数の玉が、先を争つて、フワリフワリと昇つて行つたのでございます。お話したのでは分りますまいが、本当に絵の様で、又何かの前兆の様で、私は何とも云えない怪しい氣持になつたものでした。何であろうと、急いで下を覗いて見ますと、どうかしたはずみで、風船屋が粗相をして、ゴム風船を、一度に空へ飛ばしたものと分りましたが、その時分は、ゴム風船そのものが、今よりはずっと珍らしいうござんしたから正体が分つても、私はまだ妙な氣持がして居りましたものです。

妙なもので、それがきっかけになつたという訳でもありますまいが、丁度その時、兄は非常に興奮した様子で、青白い顔をぼつと赤らめ息をはずませて、私の方へやつて参り、いきなり私の手をとつて『さあ行こう。早く行かぬと間に合わぬ』と申して、グングン私を引張るのでございます。引張られて、塔の石段をかけ降りながら、訳を尋ねますと、いつかの娘さんが見つかつたらしいので、青畳を敷いた広い座敷に坐つていたから、これから行つても大丈夫の所にいと申すのでございます。

兄が見当をつけた場所というのは、観音堂の裏手の、大きな松の木が目印で、そこに広い座敷があつたと申すのですが、さて、二人でそこへ行つて、探して見ましても、松の木はちゃ

んとありますけれど、その近所には、家らしい家もなく、まるで狐につままれた様な鹽梅なのです。兄の気の迷いだとは思いましたが、しおれ返っている様子が、余り気の毒なものですから、気休めに、その辺の掛茶屋などを尋ね廻って見ましたけれども、そんな娘さんの影もありません。

探している間に、兄と分れ分れになってしまいました。掛茶屋を一巡して、暫くたって元の松の木の下へ戻って参りますとね、そこには色々な露店に並んで、一軒の覗きからくり屋が、ピシャンピシャンと鞭の音を立てて、商売をして居りましたが、見ますと、その覗きの眼鏡を、兄が中腰になって、一生懸命覗いていたじゃありませんか。『兄さん何をしていらっしゃる』と云って、肩を叩きますと、ビックリして振向きましたが、その時の兄の顔を、私は今だに忘れることが出来ませんよ。何と申せばよろしいか、夢を見ている様なとても申しますか、顔の筋がたるんでしまつて、遠い所を見ている目つきになって、私に話す声さえも、変にうつろに聞えたのでございます。そして、『お前、私達が探していた娘さんはこの中にいるよ』と申すのです。

そう云われたものですから、私は急いでおあしを払つて、覗きの眼鏡を覗いて見ますと、それは八百屋お七の覗きからくりでした。丁度吉祥寺の書院で、お七が吉三にしなだれかかっている絵が出て居りました。忘れもしません。からくり屋の夫婦者は、しわがれ声を合せて、鞭で拍子を取りながら、『膝でつらつについて、目で知らせ』と申す文句を歌っている所でした。アア、あの『膝でつらつについて、目で知らせ』という変な節廻しが、耳に付いている様でございます。

覗き絵の人物は押絵になつて居りましたが、その道の名人の作であつたのでしようね。お七の顔の生々として綺麗であつたこと。私の目にさえ本当に生きている様に見えたのですから、兄があんなことを申したのも、全く無理はありません。兄が申しますには『仮令この娘さんが、拵えものの押絵だと分つても、私はどうもあきらめられない。悲しいことだがあきらめられない。たつた一度でいい、私もあの吉三の様な、押絵の中の男になつて、この娘さんと話して見たい』と云つて、ぼんやりと、そこに突つ立つたまま、動こうともしないのでございます。考えて見ますとその覗きからくりの絵が、光線を取る為に上の方が開

けてあるので、それが斜めに十二階の頂上からも見えたものに違いありません。

その時分には、もう日が暮かけて、人足もまばらになり、覗きの前にも、二三人のおかつぱの子供が、未練らしく立去り兼ねて、うろうろしているばかりでした。昼間からどんよりと曇っていたのが、日暮には、今にも一雨来そうに、雲が下つて来て、一層庄えつけられる様な、気でも狂うのじゃないかと思う様な、いやな天候になつて居りました。そして、耳の底にドロドロと太鼓の鳴っている様な音が聞えているのです。その中で、兄は、じつと遠くの方を見据えて、いつまでもいつまでも、立ちつくして居りました。その間が、たつぷり一時間はあつた様に思われます。

もうすっかり暮切つて、遠くの玉乗りの花瓦斯が、チロチロと美しく輝き出した時分に、兄はハツと目が醒めた様に、突然私の腕を掴んで『アア、いいことを思いついた。お前、お頼みだから、この遠眼鏡をさかさにして、大きなガラス玉の方を目に当てて、そこから私を見ておくれでないか』と、変なことを云い出しました。『何故です』つて尋ねても、『まあいいから、そうしてお呉れな』と申して聞かないのでございます。一体私は生れつき眼鏡類を、余り好みませんので、遠眼鏡にしる、顕微鏡にしる、遠い所の物が、目の前へ飛びついて来たり、小さな虫けらが、けだものみたいに大きくなる、お化じみた作用が薄気味悪いのです。で、兄の秘蔵の遠眼鏡も、余り覗いたことがなく、覗いたことが少い丈に、余計それが魔性の器械に思われたものです。しかも、日が暮て人顔もさだかに見えぬ、うすら淋しい観音堂の裏で、遠眼鏡をさかさにして、兄を覗くなんて、気違いじみてもいますれば、薄気味悪くもありましたが、兄がたつて頼むものですから、仕方なく云われた通りにして覗いたのです。さかさに覗くのですから、二三間向うに立つている兄の姿が、二尺位に小さくなつて、小さい丈に、ハッキリと、闇の中に浮出して見えるのです。外の景色は何も映らないで、小さくなつた兄の洋服姿だけが、眼鏡の真中に、チンと立っているのです。それが、多分兄があとじ



さらに歩いて行つたでしょう。見る見る小さくなって、とうとう一尺位の、人形みたいな可愛らしい姿になってしまいました。そして、その姿が、ツーツと宙に浮いたかを見ると、アツと思う間に、闇の中へ溶け込んでしまったのでございます。

私は怖くなって、(こんなことを申すと、年甲斐もないと思召しようが、その時は、本当にゾツと、怖さが身にしみたものですよ) いきなり眼鏡を離して、「兄さん」と呼んで、兄の見えなくなった方へ走り出しました。ですが、どうした訳か、いくら探しても兄の姿が見えません。時間から申しても、遠くへ行つた筈はないのに、どこを尋ねても分りません。なんと、あなた、こうして私の兄は、それっきり、この世から姿を消してしまったのでございますよ……それ以来というものの、私は一層遠眼鏡という魔性の器械を恐れる様になりました。殊にも、このどこの国の船長とも分らぬ、異人の持物であつた遠眼鏡が、特別いやでして、外の眼鏡は知らず、この眼鏡丈けは、どんなことがあつても、さかさに見てはならぬ。さかさに覗けば凶事が起ると、固く信じているのでございます。あなたがさつき、これをさかさに持ちなすつた時、私が慌ててお止め申した訳がお分りでございますよ。

ところが、長い間探し疲れて、元の覗き屋の前へ戻つて参つた時でした。私はハタとある事に気がついたのです。と申すのは、兄は押絵の娘に恋こがれた余り、魔性の遠眼鏡の力を借りて、自分の身体を押絵の娘と同じ位の大きさに縮めて、ソツと押絵の世界へ忍び込んだものではあるまいかということでした。そこで、私はまだ店をかたづけないうでいた覗き屋に頼みまして、吉祥寺の場を見せて貰いましたが、なんとあなた、案の定、兄は押絵になつて、カンテラの光りの中で、吉三の代りに、嬉し相な顔をして、お七を抱きしめていたではありませんか。でもね、私は悲しいとは思いませんで、そうして本望を達した、兄の仕合せが、涙の出る程嬉しかつたものですよ。私はその絵をどんなに高くてもよいから、必ず私に譲ってくれと、覗き屋に固い約束をして、(妙なことに、小姓の吉三の代りに洋服姿の兄が坐っているのを、覗き屋は少しも気がつかない様子でした) 家へ飛んで歸つて、一伍一什を母に告げました所、父も母も、何を云うのだ。お前は氣でも違つたのじゃないかと申して、何と云つても取上げてくれません。おかしいじゃありませんか。ハハハハハハ老人は、そこで、さもさも滑稽だと云わぬばかりに笑い出した。そして、変なことには、私も亦、老人に同感して、一緒になつて、ゲラゲラと笑つたのである。

「あの人たちは、人間は押絵なんぞになるものじゃないと思ひ込んでいたのですよ。でも押絵になつた証拠には、その後兄の姿が、ふつつりと、この世から見えなくなつてしまつたじゃありませんか。それをも、あの人たちは、家出したのだなんぞと、まるで見当違いな当て推量をしているのですよ。おかしいですね。結局、私は何と云われても構わず、母にお金をねだつて、とうとうその覗き絵を手に入れ、それを持つて、箱根から鎌倉の方へ旅をしました。それはね、兄に新婚旅行がさせてやりたかつたからですよ。こうして汽車に乗つて居りますと、その時のことを思い出してなりません。やつぱり、今日の様に、この絵を窓に立てかけて、兄や兄の恋人に、外の景色を見せてやつたのですからね。兄はどんなにか仕合せでございましたらう。娘の方でも、兄のこれ程の真心を、どうしていやに思ひましょう。二人は本当の新婚者の様に、恥かし相に顔を赤らめながら、お互の肌と肌とを触れ合つて、さもむつまじく、尽きぬ睦言を語り合つたものでございますよ。

その後、父は東京の商売をたたみ、富山近くの故郷へ引込みましたので、それにつれて、私もずつとそこに住んで居りますが、あれからもう三十年の余になりますので、久々で兄にも變つた東京が見せてやり度いと思ひましてね、こうして兄と一緒に旅をしている訳でございますよ。

ところが、あなた、悲しいことには、娘の方は、いくら生きているとは云え、元々人の拵えたものですから、年をとるということがありませんけれど、兄の方は、押絵になつても、それは無理やりに形を変えたままで、根が寿命のある人間のことでですから、私達と同じ様に年をとつて参ります。御覧下さいまし、二十五歳の美少年であつた兄が、もうあの様に白髪になつて、顔には醜い皺が寄つてしまいました。兄の身にとっては、どんなにか悲しいことでございます。相手の娘はいつまでも若くて美しいのに、自分ばかりが汚く老込んで行くのですもの。恐ろしいことです。兄は悲しげな顔をして居ります。数年以前から、いつもあんな苦し相な顔をして居ります。それを思うと、私は兄が氣の毒で仕様がないのでございますよ」

老人は暗然として押絵の中の老人を見やつていたが、やがて、ふと氣がついた様に、「アア、飛んだ長話を致しました。併し、あなたは分つて下さいましたでしょうね。外の人達の様に、私を氣遣いだとはおっしゃいませんでしょうね。アア、それで私も話甲斐があつたと申すものですよ。どれ、兄さん達もくたびれたでしょう。それに、あなた方を前に置いて、あんな話をしましたので、さぞかし恥かしがつておいででしょう。では、今やすませて上げますよ」

と云いながら、押絵の額を、ソツと黒い風呂敷に包むのであった。その刹那、私の気のせいであつたのか、押絵の人形達の顔が、少しくずれて、一寸恥かし相に、唇の隅で、私に挨拶の微笑を送った様に見えたのである。老人はそれきり黙り込んでしまった。私も黙っていた。汽車は相も変わらず、ゴトンゴトンと鈍い音を立てて、闇の中を走っていた。

十分ばかりそうしていると、車輪の音がのろくなって、窓の外にチラチラと、二つ三つの燈火が見え、汽車は、どことも知れぬ山間の小駅に停車した。駅員がたった二人、ぽつとりと、プラットフォームに立っているのが見えた。

「ではお先へ、私は一晩この親戚へ泊りますので」

老人は額の包みを抱てヒョイと立上り、そんな挨拶を残して、車の外へ出て行つたが、窓から見ていると、細長い老人の後姿は（それが何と押絵の老人そのままの姿であつたか）簡略な柵の所で、駅員に切符を渡したかを見ると、そのまま、背後の闇の中へ溶け込む様に消えて行つたのである。

